

や やるぞ～ ま まけないぞ～ が がんばろうぜ～ た 楽しい学校になるように

## 粗にして野だが卑ではない！

### ～「カッコいい」シリーズ ③～

私の校長だよりでも何度か登場した私の次兄は、3歳年上である。小さい時から彼への服従を強いられ、彼から虐げられてきた私にとって、彼はこの世で最も怖い存在であった。果敢に応じた兄弟喧嘩でコテンパンにやられて泣かされた回数は計り知れず、血に染まった畳の枚数は何枚あっただろう。

次兄は小さい頃から豪儀なところがあって、小学校の時のある日の帰り道に、当時5年生だった彼が6年生と殴り合いの喧嘩になった。そばで不安そうに見ていた自分に「母さんにチクったらタダじゃおかねえからな。」と念を押された。でも、ほっぺたを真っ赤にはらして帰れば、母親だってすぐに気づく。母親の圧力から仕方なく詳細を打ち明けなければならない立場に追い込まれた私を、兄貴はずっと睨んでいた。

そんな次兄なので、中学校でもかなりやんちゃな存在だったらしい。中学校は入れ替わりだったが、私が中学に入学して、初めて教務室に入ったら、いかにも怖そうな生徒指導主事の先生が話しかけてきた。「お前、Oの弟なんだって？ 兄ちゃん元気か？ 兄ちゃんみたいにあんまり迷惑かけないでくれよな。」その先生がそう言うと、他の何人かの先生方も呼応するように、「え、Oの弟？」「兄貴には随分手こずったなあ。」などと一斉に話しかけてきた。奴（兄貴）は相当の悪だったのか？ それにしては、どの先生のものもの言いように、それほど嫌みは感じられなかった。というより、どちらかと言えば、温かみを感じるくらいなのが不思議に思えた。

しばらくして何度か教務室に入出入りすると、教務室の入口に、「破損届」と題したノートが置いてあるのに気がついた。生徒が、校内の造作物や備品等を壊したりすると、そのノートに詳細を記入して先生に申し出て、自分で用務員さんに頭を下げて直してもらうことになっていると知った。

当時は古い木造校舎で、特に窓ガラスは厚さ2mm程度の薄っぺらい代物だったので、野球のボールなどが当たったり、悪ふざけしたりして体や物が当たると結構簡単に割れたりしたものだ。

そしてそのノートを開いて驚いた。昨年度の窓ガラス等の破損で、うちの兄貴の名前がずらっと並んで溢れていたのだ。

どれだけの悪だったんだ。恐るべしハカイダー。「こんな兄貴の弟ということで、この先の中学校生活は、肩身が狭い。」と憂鬱な気分になった。

ところが、いわゆる不良っぽい3年生などから、「O先輩にいろいろ良くしてもらったんで、よろしく！」なんて向こうから挨拶されるし、生徒会の

3年生の女子の先輩から、「お兄さんは面白くてだれにでも優しくかったから、みんなの人気者だったよ。」なんて言われて、こちらも調子が外れた。

そして、ある日、「破損届」ノートの真相をある先輩が教えてくれた。

「お前の兄ちゃんは自分の責任で窓を割ってなくても、自分と関係なくても、付き合いで友達について行って『俺もやりました』って言って、自分の名前も記入していたよ。本当に壊した当事者にとってみれば、一人で怒られたり謝ったりするより、気が楽だし心強いからね。まあ、先輩の趣味みたいなもんだな。先生方も周りのみんなも、だれもが知っていたよ。」

なるほど、何たるお人好し。でも何かうれしい気分になった。うかつにも生まれて初めて兄貴を見直したと言ってもいい瞬間だったかもしれない。

結局、中学校時代の次兄に関する情報を集めれば集めるほど、私が家庭で抱いていた兄貴へのイメージと学校での彼の評判は、どんどん乖離するばかりだった。そして最終的には「兄貴って、結局いい奴だったんじゃない。」との結論に至った。

私の好きな作家に、経済小説の開拓者で直木賞作家の、城山三郎がいる。城山の代表作に、第5代国鉄（現JR）総裁をつとめた「石田礼助」という人物の半生記の小説がある。その本の題名が「粗にして野だが卑ではない」だ。これは、石田自身が、国会の答弁で国会議員に向けて発言した、石田本人のモットーである。

「粗にして野だが卑ではない」。言動が雑で粗暴な面があっても、決して卑しい行いや態度を取ることはしない、という意味である。

石田は、型破りの経営者として名を馳せ、経営難に陥ってだれもなり手のいなかった当時の国鉄総裁を、火中の栗を拾う形で引き受けた。そして、どんな困難や障害にも屈することなく、私心を捨て身を挺して、命をかけて国鉄改革に辣腕を振るった。そして国会で自分たちの責任を棚上げし、身勝手な発言を繰り返す国会議員を、自分は「粗にして野たる人間」だがと自己開示した上で、正論を堂々と述べて、並みいる国会議員をたしなめた。

「粗にして野だが卑ではない」。歴史上の偉人と兄貴とを比べたら石田礼助公にたいへん失礼だが、あの次兄に”男気“を感じた。次兄の姿を、不覚にも「カッコいい」と感じた自分がいた。

それでも一方で、彼に虐げられてきた暗黒史を、私は今でも決して忘れることはない。

私の頭をつむじの横には、V字のハゲがある。次兄との兄弟喧嘩で負ったケガの治療で縫った跡だ。当時、我が母校の男子は皆坊主頭。そのV字のハゲをみんなにバカにされるのが本当に嫌で嫌で仕方なかった。「Vっパゲ」なんて渾名もつけられた。

青春を返してほしい。他人に優しく身内に厳しい兄は、確かに「卑」ではない人間とは認めるが、あまりにも「粗」にして「野」過ぎたのでは許せない。少しは私にも優しくしてほしい。それでも、いつまでも愛してやまない相手であり、最高の反面教師、最大の永遠のライバルでもある。